▼編集後記

コロナウイルスが、グローバルに問題となるなか、今号では特集として「生体管理の現代史」を掲載することができた。特集でとりあげられているのは可視化された生体の管理、あるいは生体を可視化するための管理であるが、有史以来人類が見えない生体の猛威に右往左往してきたのは、病気の歴史研究が明らかにしてきたところである。右往左往したところから、見える見えないにかかわらず、生体管理という発想が定着したのだろう。

今年になってからの全世界的な対応は、あいまいな判断に基づくという点で、一九世紀のコレラ流行をめぐるヨーロッパ社会の反応と大きく違わないように感じる。そうした状況の中で、歴史研究の役割は、過去の右往左往のあり様や管理のメカニズムついて冷静な情報提供をすることかもしれない。先ごろ刊行された『史林』一〇三巻一号の「病」をめぐる特集号が、通常の二年経過後ではなく、即刻ネットで公開されたのもそうした判断が働いたのであろう。本号の「特集」も広く読まれることを切に願う。

他にも充実した投稿論文二篇と広がりのある講演原稿の翻訳も掲載でき、充実した誌面となった。今後も『ゲシヒテ』の刊行にご協力いただければ幸いである。（北村昌史）

今号より、七年ぶりに編集実務を担当することになりました。その割付、校正作業は二〇一九年の一二月より始まり、翌年の三月に佳境を迎え、四月に完了しました。当初、二月下旬にこの「後記」の第一稿を書いていた際は「…に佳境を迎え、四月に収束するという、ちょうどコロナウイルスと同様の推移を辿ることになりました」と楽観的な観測のもと下書きしておりました。が、実際には、四月三〇日現在、収束の見通しは立っておりません。防疫を趣旨としつつも、移動制限という個人の自由を制限し管理する措置を各国政府・自治体が取るなかにあって、今号の「特集」は結果的に時宜にかなうものとなりました。ただ、望むらくは、穏やかに研究、仕事に励める毎日の再来せんことをです。仮にそのような日々が、幻影に過ぎずとも、です。最後に、この度、お忙しいなか校正にご協力くださりました執筆者の方々に御礼申し上げます（T・S）

▼編集委員
北村昌史（大阪市立大学）
服部伸（同志社大学）
田野大輔（甲南大学）
中野智世（成城大学）
近藤正基（京都大学）
西田慎（奈良教育大学）
▼編集実務
鈴木健雄（京都大学）

ゲシヒテ
第13号
2020年4月30日発行

▼編集発行
ドイツ現代史研究会（代表・姫岡とし子）
〒602-8580
京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学文学部　服部伸研究室内
▼印刷
株式会社オーエム